1990年から1995年の パルミラ東南墓地における調査

Excavation from 1990 to 1995 at Southeast Necropolis in Palmyra

奈良パルミラ遺跡学術調査団 樋口 隆 康^{*}
HIGUCHI Takayasu

西 藤 清 秀^{**}
SAITO Kiyohide

はじめに

本稿では奈良パルミラ遺跡学術調査団(団長 樋口隆康)が1990年以来従事しているパルミラ東南墓地の調査について述べることにする。この調査は、シルクロード学術研究センターが奈良県の援助をうけ、シリア・アラブ共和国の考古総局(General Directorate of Antiquities and Museums)の特別の許可を得て、パルミラ博物館の協力のもとに実施しているプロジェクト研究である。

この調査は、パルミラ博物館から薦めのあった東南墓地を選択することになった。東南墓地は、パルミラ遺跡の中核をなすベル神殿からおおよそ1.5kmのところにひろがっている。この墓地はかなり崩壊が進んではいるが、約20基あまりの塔墓、家屋墓が存在し、さらに天井部が崩落した地下墓もかなり見られる。この東南墓地は他のネクロポリスと異なりさほど調査が実施されておらず、その詳細が不明である。わずかに1950年代に石油のパイプライン敷設時にともなって10基余りの地下墓がシリア政府によって発掘調査されたにすぎない。さらにこれらの調査の記録はあまり公表されていない。

上記の事柄が契機となり、1990年春、奈良パルミラ遺跡学術調査団が結成され、同年秋に電磁波による地下探査、1991、92年にA、C号墓の発掘調査を実施した。1994年からはF号墓の調査を実施し、1997年現在も調査を継続中である。従って今回は1995年までの調査の概略を報告することにする。なお、A、C号墓の調査の詳細についてはすでに発刊された報告書(T. Higuchi & T. Izumi ed., *Tombs A and C, Southeast Necropolis, Palmyra, Syria, Surveyed in 1990-92*, Research Center for Silk Roadology, 1994)を参照されたい。

* シルクロード学術研究センター所長
Director, Research Center for Silk Roadology

** 奈良県立橿原考古学研究所主任研究員
Chief Researcher, Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture

I. A号墓の調査

パルミラの墳墓の発掘調査をするという特別な機会を得たため未盗掘の地下墓の発掘調査を実施したいという意向の下に、1990年まず応用地質株式会社の協力を得て電磁波による地下探査を約30,000平方メートルにわたって実施した。その結果、5ヶ所にて異常反応が見られ、地下墓の存在する可能性が指摘された。

翌1991年、レーダ探査によって最も地下墓の存在が期待されたA地点の発掘調査を実施した。しかし、当初探査の反応から地下墓の天井部と考えていた箇所は、家形墓の基礎部および棺室の壁部であることが判明した。

この家形墓はA号墓と命名され、調査の結果、一辺11m前後のほぼ正方形を呈した家形墓の地下部に当り、16の棺室が配置されていた。この墓の上部構造は完全に破壊されていた。しかし、この墓の入口は西を向いていたことが棺室の配置と墓道的な施設からうかがえた。また、棺室は酷く荒らされ、人骨の遺存状況も劣悪であり、遺物もランプ、ガラス器が僅かに出土しただけで、原位置を保つ遺物は皆無であった。これらの遺物からこの墓の築造は、2世紀後半から3世紀の前半頃であろうと考えられる。

A号墓の発掘調査での一番の成果は、棺室を配置していくに際して周壁と棺室壁部のあたりの部分に朱線を引き、棺室の配置をおこなっていることが確認でき、さらにその基準となる尺度が1.85cmであると考えられたことである。

II. C号墓の調査

次にC地点の発掘は1991年と1992年の2ヶ年にわたって調査を実施した。C号墓は、東西方向に主軸を向け、前庭、門、主室、左側室からなる。墓道は斜めに下降していく階段から成り、全長8.0m、幅2.9mある。主室は全長10.4m、幅3.0m、左側室は全長3.4m、幅2.0mであり、パルミラの地下墓としては現在知られている中では最小の規模である。しかしこの地下墓が、未盗掘の墓であったことが調査の成果をより充実させることになった。主室に入ってすぐ左側壁に建造碑石が立てかけられていた。この碑文には「紀元後109年4月にマルコ（MLKW）の息子のルシャムス（LSMS）の息子のヤルハイ（YRHY）が子孫の永遠の繁栄のためにこの地下墓を建造した」ことが記されていた。主室の右側壁には1列5段からなる棺棚が2列設けられ、その内の1つの棺室には銘文を有しない男子の胸像がはめ込まれていた。また、左側壁には1列の棺棚が配され、少年および少女の全身像が棺室にはめ込まれていた。しかし、少年像は天井部が崩壊した時に棺室から外れ、原位置を保っていなかった。少女像は左手にオリブの枝を握り、左肩上方にヤルハイの娘を示す碑文が刻まれていた。転落して発見された少年像には左手に鳩、右手に一房の葡萄があしらわれ、左肩上方にはルシャムスの息子、ヤルハイを

示す碑文が刻されていた。両彫像の碑文には赤色顔料が塗布されていた。

主室奥正面は、軟質石灰岩の板材で構築され、床面下1段を含め5段、4列の棺棚からなるが、中央2列の最上部にはアーチ形の棚が設けられているため19の棺棚が存在する。しかし、19の室のうち使用されていたのは17ヶ所であった。さらに使用されていた室のうち4ヶ所に彫像がはめ込まれ、すべて原位置を保っていた。4カ所の彫像のうち、3カ所は棺棚中央上半に位置し、アーチ形棚にも彫像が配されていた。アーチ形棚にはめ込まれていた彫像は半円形を呈し、幅87cm、高さ42cmの大きさであった。この彫像には何等の銘文も見られなかったが、円形光背の男子の胸像がその左右に配された有翼の女神によって天空へ誘われている様子が表現されている。このモチーフはローマの石棺にみられるパターンで、パルミラ葬送彫刻では初現のものと考えられる。これより年代の下る西南墓地に所在する三兄弟の墓に描かれた壁画、東南墓地にある186号墓の石棺の浮き彫りにも見ることができる。

このアーチ形棚の直下には、並列する2点の男子彫像をはめ込んだ棺棚が存在する。右側の彫像はこの墓を建造したヤルハイであり、左側はヤルハイの息子のシャルマ（SLM）であることが各々の碑文からうかがえる。シャルマの彫像の右肩には少年の立像が存在するが、この彫像に刻まれた銘文にはシャルマとマラ（MLA）の娘の表現がみられる。さらにもう1点の彫像は正面に向かって左側の羽目板にもたれかけさせるように張り付けられていた。この彫像は、ヤルハイの息子マラ（MLA）であることが碑文に記されていた。

側室には石棺1基と土坑墓1基が存在するだけであった。石棺には何等の彫刻も見られず、陶板で蓋が施された簡素なものであった。棺内は、2段に仕切られ、各段に1体の遺体が納められていた。さらに土坑墓にも1体埋葬が施されていたが、この施設についてはこの地下墓が主室のみで構成されているときの側壁に設けられた棺棚最下段の棺の可能性も含んでいる。つまり側室がやや時期を遅れて付設されたと考えられる。

C号墓は、基本的には7列の棺棚に5段の棺棚が存在するが、埋葬施設として使用された棺は30基である。各棺の規模はほぼ同じで、全長190cm、幅45cm、高さ50cmである。30棺には51体が埋葬され、大部分の棺には1体以上の埋葬が見受けられ、中でも1棺に6体もの埋葬がおこなわれていたものもあった。さらに側室床面からは3体、主室床面からは7体の乳幼児骨を検出した。このように埋葬されていた61体のうち30体が男性、13体が女性で18体が性別判別不可能な子供および乳幼児であり、主に男性が主体となってこの墓に埋葬されていることが判明した。この数的傾向は、家族関係や婚姻制度に起因するものと思われる。またこの調査において乳幼児は、特に1歳未満の新生児は主室床面に設けられた方形の土坑に埋葬されていた。つまり1歳以上の子供達はすべて

棺柩に設けられた棺に大人と共に埋葬されていたことは、年齢もまた埋葬形式を考える上で重要な要因になると考えられる。

この地下墓を建造したヤルハイは、遺存した人骨から身長約170.2cmで、49歳から59歳ぐらいの男性かと推定できる。さらにヤルハイの息子のシャルマは、20歳から39歳位で亡くなった成人男子と考えられ、また成人女性と子供、火葬された成人男性を伴っている。もう一つの名前の判明しているマラは、身長168.6cmで、60歳前後で亡くなった男性と考えられるが、20歳位の女性と共に埋葬されていた。少女アシュタルト（'STRT）は、一人で葬られ、約10歳で亡くなったと考えられる。少年ヤルハイ（YRHY）は、彫像が棺から離れて出土したため、明確な判断がくだしえなかった。また人類学的観察から被葬者には関節炎などの病的な症状や、歯が一部変色している傾向も見られた。

C号墓では遺体ばかりでなく、遺物も発掘している。遺物は、主室・側室床面、棺、土坑墓内からさまざまなものが出土している。主室・側室床面からは土器、土製ランプが出土し、死者への奉納的な要素を示している。しかし、土器以外の遺物は、基本的には幼児用土坑墓とマラーを埋葬した棺内であった。この墓を建造したヤルハイ、その息子のシャルマ、他にアシュタルトや少年ヤルハイ、銘文を持たない男子などの彫像をはじめ込んだ棺内からは一切の遺物の出土がなく、副葬品を伴わない葬送方式がパルミラに存在したと考えられる。しかし幼児やマラの埋葬空間には少なからず遺物が副葬されており、何か悲劇的な死因が、そのような遺物を副葬するという形で表現されている可能性がうかがえる。例えばマラの棺室には若き女性がともに葬られ、そこには銅鏡、ガラス容器、革製容器が副葬されており、さらに幼児墓の一つにはガラス容器、銅製ピンなどが副葬され、何一つ遺物を伴わない一般の埋葬施設とは明確な相違が見られる。

このようにC号墓の調査では未盗掘の埋葬施設から彫像と埋葬遺体との関係、副葬品から見た他界観念に関する問題点、乳幼児墓の問題、遺体自体がもつ人類学的、病理学的問題点など多くの課題が浮かび上がってきた。以上の点をより究明するために、C号墓発掘途中に発見したもう一つの地下墓F号墓の発掘調査に1994年度から本格的に取り掛かった。

III. F号墓の調査

F号墓の墓道の階段部は、壁および段とも軟質の石灰岩で葺かれ、後世石材の一部が剥されているが、全長10m、幅2.6mであった。門は、硬質石灰岩からなり高さ3.4m、幅2.0mを測り、まぐさ石には豊富な装飾があり、さらに5行のパルミラ文字の碑文が刻まれていた。それによると、この墓が222年10月にユウレヤ（YWLYA）＝アウレルヤ（AWLRYA）＝ボルバ（BWRPA）とボレイダ（BLYDA）とザブディボル（ZBDBWL）

がユリウス (YWLVS) = アウレリウス (AWRLVS) = ヤディヤベル (YDYABL) に譲渡し、222年? 11月にはボルパとボレイダとザブディボルとタイマ (TYMA) がユリウス = アウレリウス = マラ (MLA) に譲渡したことがうかがえた。

この地下墓は、第3区から出土した建造碑文から紀元128年11月にマルコ (MLKW) の子のボルパ (BWRPA) とボルハ (BWLHA) の兄弟によって建造されたことが判明した。

墓室は、地上からの深さ5.5mに位置し、主室と左右の側室からなる。主室は、幅2.6m、全長15.1mを測り、4区からなる。第1区は、長さ5.7m、崩壊したボールド天井を含めすべて軟質石灰岩の切石で内装されている。左右側壁上部には浮き彫り装飾が施されたエンタブラチャーがあり、そこには、アーカンサスの葉と花文で飾られたコーニスと、その下部には卵鋸文様、アーカンサスの葉と花文を配したモディリオン、デンティル、さらに卵鋸文様という順で文様が配されている。これらの文様帯に下部には花や果実を中心に配した唐草文をあしらったフリーズが設けられ、その下部にはファスキアのあるアーキトレーブがあり、右側壁のこの部分には銘文が刻まれている。

また、墓室に入る階段の下から2段目の右側壁に井戸を納めたアーチ付のニッチが設けられている。墓室の前半部の左右には側室が取り付くが、その入口に設けられたアーチのキーストーンにはメドゥーサの頭部が浮き彫りにされている。このメドゥーサは、頭髮、眉毛、目、口等に赤色顔料が塗布され、さらに頭髮には花のベルトをあしらい、パルミラ風に少し変化させている。第1区の左右側壁にはアーチを呈した幅約1.6m、高さ1.05m、奥行き0.7mのニッチがそれぞれ設けられ、その中には石棺が安置されているが右側が墓建造者ボルパの解放奴隷とその息子、左側がボルパの父マルコの解放奴隷とその息子の饗宴図を表現した彫刻が納められている。

第2区は、長さ4m、天井部は軟質石灰岩でボールド状に仕上げられていたと考えられる。両側壁には各6本の壁柱の間に棺柩が造られている。これらの壁柱は、第1区と第3区の角柱に接する箇所は4/1円柱、その他は半円柱で仕上げられている。これらの柱の上にはコリント式の柱頭が乗せられ、さらにその上部には第1区と同様のエンタブラチャーが取り付けられていた。しかし現状は後世の石材採集のためにほとんどが持ち去られていた。この円柱間にある左右5列の棺柩は窓枠状の縁飾りで整えられている。

第3区は、全長2.2m、出土した石灰岩の切石からボールド天井部は石材で化粧されていたと考えられる。両側壁には各4本の壁柱とその間の棺柩がある。この空間の構造は上部構造がすべて破壊されているものの基本的に第2区と同様である。

奥壁には、地上2段地下一段の棺柩4列があり、その上面からさらに奥へ龕状に掘りこんだ棺室が設けられている。棺室内には石棺3基がコの字に配され、家族饗宴の場面

を表現した彫像を蓋石の前面にあしらっている。奥の中央の石棺がこの墓の建造家族を表しているものと考えられ、向かって左側に左肘をついて横臥した主人と考えられる男性とその後ろに3名の息子と思われる男子が立ち、足元には妻と子供が腰掛けている。石棺身部には、成人の男女4体の胸像が彫刻されている。この石棺の左右の二つの石棺では、蓋部にそれぞれ3体の成年男子がカップを持って横臥する姿勢を上半身だけで表現している。それらの身部にはそれぞれ男子2体、女子1体の胸像が彫刻されている。

右側室は、全長8.2m、天井部は崩壊しているが高さ約3.5mほどのボルト天井であったと考えられる。内部は未完のままであるが、2区構成を意識し、中央辺りに区切りがある。前半部は、全長4.5m、幅2.4mで両側壁に4ヶ所、計8ヶ所に将来棺槨が構築できるように額縁状に浅く掘り窪められている。しかし、北壁第1番目だけが棺槨として実際に使用されていた。額縁状に整形されていた棺槨予定箇所は、高さ1.8m、幅0.5mで約5cmの縁が周囲にめぐっていた。後半部は、全長3.6m、幅2.2mで前半部に比べやや狭くなっている。両側壁には各4ヶ所、奥壁に3ヶ所の棺槨予定箇所が設けられていた。空間構造や、各規模はほぼ前半部と同じである。

左側室は、全長4.7m、幅2.5m、右側室の前半部の規模に等しいが、損傷は著しい。この側室の両壁には各1カ所の槨と3カ所の棺槨予定箇所が設定され、奥壁にも3カ所の予定箇所が設けられている。2カ所の棺槨は、双方とも側室の入口にもっとも近い位置に存在している。棺槨予定箇所の規模は、右側室とほぼ同様である。

この墓から出土した遺物は、彫像付き建造碑文、銅銭、金製歩揺、ガラス容器、ガラス玉、子安貝、鉄鏃、土製ランプ、土器などさまざまなものが存在する。これらの遺物のうち一部ランプや土器にビザンチン以降の遺物も含まれるが、大部分は2世紀から3世紀のものと考えられる。このうち彫像付き建造碑文は、第2区の床面に碑文面を上方にして置かれ、父をマルコとするボルバ、ボルハの兄弟によって128年11月にこのF号墓が建造されたことが記され、さらに角を生やし、大きな耳環をし、舌を出した髭もじゃのサチュロス風男性を浮彫りに表している。この種の彫像は、パルミラでは初めての発見である。数点の金製歩揺が主室および側室床面より出土し、直径0.6cmの円形を呈し、半球状に仕上げられている。内面には糸を通す針金に取り付けられている。この歩揺は、遺体の衣服もしくはそれを被う布に取り付けられていたと考えられる飾金具である。ガラス容器は、香油用小瓶で右側室から多く出土したが、完全に遺存しているものはなかった。ガラス玉、子安貝、鉄鏃が左側室入口付近から出土し、そのうち子安貝は、長さ2.0cm、幅1.5cmで貝の背を縦切りにして糸を通すような形状をしている。

土製ランプは、遺物の中でもっとも多く、主室、側室を問わず全面的に出土している。それらの中には鶏が林檎をくわえた図や、天使が竖琴を弾く図柄や、メドゥーサの

頭部を描いたものなどが存在する。土器はランプ同様各所で出土しているが、中には土器内部に漆喰を塗り込め、水鉢として転用しているものもある。しかし大部分の土器は破片である。

F号墓は、子孫がパルミラの行政長官という要職にあった人の子供のボルバ、ボルハの兄弟によって紀元128年11月に建造されたことが建造碑文から判明した。この碑石には邪的なものに睨みを利かす悪魔的なサチュロスの像があり、さらに左右の側室入口のアーチにも同様の使用目的で採用されていたものと思われるメドゥーサが彫刻され、パルミラにおける葬送観念の一端を示していると考えられる。

またこの地下墓の装飾には多様な植物文様が駆使され、これほど華麗な文様をあしらった地下墓もパルミラでは貴重な存在である。さらに饗宴像付石棺5基が原位置で検出されたことはパルミラ発掘史の上でも画期的なことであった。

さらに左右の側室の調査では未完成ではあるが、側壁に将来棺を納める棺棚を設けるためのレイアウトがなされていた。主室は、丁寧に軟質石灰岩によって内装され、ボルバ、ボルハの家族墓として使用されたが、側室は主室と同時に着工されたものの、近い将来使用する計画がなく、単に棺棚のレイアウトだけで作業を終了させたと考えられる。つまり、このF号墓は128年に建造され、彼らの子孫によって使用されなかった側室が他人に譲渡された箇所に対応することが門のまぐさ石に見られる譲渡碑文からうかがえる。

ま と め

以上が1995年までの奈良シリア・パルミラ学術調査団の調査内容である。さらに1996年以降も奥室に設けられた石棺や棺棚内の納体室の調査を実施し、多数の人骨を検出しているが、これら人骨の人類学的な調査を実施し、彫像に記された碑文と人骨との関連や骨自体のもつ情報収集、さらに遺体と遺物の関わりからパルミラ人の他界観念など墓の総合的な調査研究を進め、新たなパルミラ研究の資料を提供できるものと考えている。

F号墓平面图

A号墓全景

C号墓主室正面

C号墓 アーチ型部分彫像

F号墓全景（北西より）

F号墓 入口から見た中央墓室の全景

F号墓 右側室入口アーチのキーストーンに刻まれたメドゥーサ